

SDGs と教育(2) ～教育の役割と日本思想の観点から～

川角 博^{*1} 小沢一仁^{*2}

SDGs and Education (2) ---Perspective of education and Japanese traditional thought---

Hiroshi KAWASUMI ^{*1} Kazuhito OZAWA ^{*2}

The purpose of this paper is to clarify the relationship between SDGs and education.

In chapter 1, Kawasumi describes what education plays an important role in bringing people from all over the world to SDGs.

In chapter 2, the problem with the SDGs is that the economy is at the center of it. Umehara states that there is a view that all things are alive in traditional Japanese thought. It is necessary in the education of the SDGs to make use of this view in education.

はじめに

本論では、SDGs と教育(1)に続いて、SDGs と教育の関わりについて検討する。

先に検討したように、SDGs で示されている「持続可能な開発目標」は、すべての国連加盟国が賛同していることに特徴がある。そして、この目標の実現においては、2つの理念と5つの原則と3つの側面がその背景にある。

ひとつ目の理念は、「変革なきところに持続可能な世界はない」であり、変革である。ふたつ目は、「だれ一人取り残されない」ことである¹⁾。つまり、未来の世界を作る目標である SDGs における理念は、世界の変革と個人を取り残さないという世界の変革に個人をつなげていることである。

そして、5つの原則とは、「人間 (People)・地球 (Planet)・繁栄 (Prosperity)・平和 (Peace)・パートナーシップ (Partnership)」という、英語で書くと5つのP¹⁾として示している¹⁾。さらに、3つの側面として、環境・経済・社会を挙げている。この3つの側面について、SDGs 提唱以前と以後の違いは、この3つの側面を「統合」し「調和」させることという表現になったことと蟹江は指摘している¹⁾。特に、経済発展と社会問題および環境問題が同じ土俵で議論されるようになり、この3つの側面が重要であることについての「世界規模のコンセンサスができた」ことが「SDGs 成立の最大の意義」である¹⁾。

本論では、教育の役割と教育の背景にある日本の伝統思想から、SDGs を教育にいかにして生かすかについて、その背景から検討することを目的とする。

第1章 SDGs と教育の役割

川角 博

SDGs の達成は、世界市民によるパラダイムシフト無くして実現はできない。これを可能にする鍵は、教育である。教育により世界市民の価値観を育て、行動を生み出し、社会の動きに影響を与えることが重要である。かつては一部の天才や英雄が世界を動かしたが、現代社会のグローバルな課題を解決するためには世界市民を動かさなければならない。

1543年、コペルニクスが「天球の回転について」を発表し、地動説が提唱された。それから半世紀後、ガリレオは望遠鏡という新しいツールを手に入れ、地動説を確信していった。1609年、ガリレオ・ガリレイが初めて望遠鏡を夜空に向け、宇宙への扉を開いた。

400年前、誰もが信じて疑わなかった宇宙観が、大きく変わっていった。科学における大変革、パラダイムシフトが起こった。いま必要とされるパラダイムシフトとは何だろうか、誰にそれを起こすことができるのだろうか。

1. 科学における革命的転換

人類は、科学における革命的転換を重ねて、大きな進歩を繰り返してきた。パラダイムシフトは、長い歴史の中では突然起こっているようではあるが、決して偶然に起こっているのではない。新たな観測事実の中に、理解を超える矛盾を見いだし、これを解決せずにはいられなかった真理を追究する科学者の信念が、パラダイムの転換を生み出したのである。大きな矛盾は、このパラダイムシフトにより解決されてきた。進歩は、必ずしも連続的には起きない。時々、不連続にステップアップする。

^{*1} 東京工芸大学 工学部工学科 非常勤講師 ^{*2} 東京工芸大学 工学部工学科 准教授
2022年3月25日 受理

400 年前、宇宙観のパラダイムシフトが起こり、100 年前、時間と空間、それに物質観のパラダイムシフトが起こった。これは、人々の生活を大きく変える大変革の始まりであった。

二十世紀の初め、物理学は激動の時代を迎えていた。アインシュタインによる光量子仮説、特殊相対性理論、一般相対性理論、トムソンによる電子の発見、ラザフォードによる原子核、陽子の発見、放射線の発見、チャドウィックによる中性子の発見、ミクロの世界の見方を変えた量子論などまさに革命とも言える大激動の時代であった。パラダイムが、ニュートン力学から量子論へと大飛躍する科学革命が、起こっていた。これらをベースにして、20 世紀半ばに、人類はついに核エネルギーを手に入れてしまった。

量子力学はその後に、強力な固体物性物理学を生み出し、トランジスタ、IC 等の発明がデジタル技術革命を生み出し、現在のコンピュータ・ネットワーク通信社会を支え、Society5.0¹⁾の扉を開こうとしている。また、19 世紀半ばにマックスウェルが存在を予言した電磁波は、19 世紀末に実証されると、20 世紀初めの年には大西洋を越える通信に成功し、現在の全地球的な通信網を可能にした。これらは社会構造や国際関係、個人の価値観にも大きな影響を与え続けている。このグローバルな通信網は、世界市民に平等な情報をいち早くもたらし、民主化への強力なツールとなる。しかし、悪意に基づくグローバルネットワークの使用は、民主主義の崩壊につながる危険な武器ともなる。これを生かすも殺すも、グローバルで民主的な視点を持った世界市民の判断力と行動力次第である。学校は、これを生かせる市民を育てなければいけない。

2. パラダイムシフトを起こせ

これまでのパラダイムシフトは、人類に幸福をもたらしたのだろうか。これに唯一の答えがあるとは思えない。ただ、100 年前の科学革命以来、今がパラダイムシフトを必要とされている時代であろうことは感じられる。ただし、それは科学革命ではなく、人類の生き方に関する価値観の、全世界的な転換への要請である。

地球は、これまで人類のわがままな行動のつけを大らかに吸収してくれていた。地球の環境規模のサイズが人類の活動を吸収できたのである。しかし、人類は、森林を焼き、化石燃料を燃やし、大気組成すらも変えかねない勢いである。人類は、母なる地球を傷つける、悪い子供に育ってしまった。

これまで幾度かの科学革命を経て、人類は、科学の難問を乗り越えてきた。鬱積した疑問を一気に晴らすかのようにパラダイムシフトが起こった、否、起こした。パラダイムシフトはなぜ起こったのか。最も大きな要因は、解決すべき不合理の鬱積があったことである。ありたい姿からの乖離が、不満をもたらす。この不満が大きな原動力となる。満たされていない状態に自分を置いておくことは、決して悪いことではない。それは力にすらなる。ところが、身を置いていない未来社会での不満を力とすることは難しい。

私たちは現在の不満に対しては敏感だが、未来に起こりうる不満には鈍感である。ここが SDGs 達成へのやっかいな障壁である。

教育が今なすべきことは、未来に起こりうる不満に対して敏感にさせることである。そのためには、科学的な根拠と論理に基づいて未来社会に対する学生自らの感受性を高め、行動力を育てる必要がある。

「現代社会と科学技術」の授業で、「現代社会とはいっつかからか」を考えさせている。20 世紀半ば以降、人類が自然環境に大きな影響を及ぼす時代となった。現代社会とは、地球資源・エネルギーの大量消費が地球規模の環境問題を突きつけている時代、大量の核兵器が全人類の平和を脅かしている時代、遺伝子操作が人類自体を自ら変え得る時代、という見方ができる。近い過去を現代への延長と捉え、過去の事実を積み重ね、未来への危機感を感じ取らせたいのである。未来への危機感を感じ取るためには、現状をグローバルに理解し、グローバルな未来を想像できる知識や分析・理解力が必要である。しかも、自分が生きていないであろう未来にさえ思いはせる価値観も必要である。このような世界市民を育てるには、教育の力が必要なのである。

地球からの警告は、21 世紀初めのパラダイムシフトを要請している。科学におけるパラダイムシフトは、少数の天才により解決案が提示され、専門家集団（科学者）がこれを支持し、一気に思考基盤の転換が起こった。しかし、現在の地球環境問題、経済問題、国際紛争等の解決には、全世界の人々の価値観の転換をおこななければならない。一握りの天才が、一気に解決をもたらす科学革命のようにはいかないのである。しかし、それらが早急に解決しなければならない課題であることは、明らかである。このためには、世界中の人々が、自分たち自身が、大きな環境負荷となっていることを認識し、持続的発展を可能とするような価値観を持たねばならない。全世界的な価値観の転換は、少数のカリスマ的リーダーの出現で出来るものではない。

「はじめに」で示したように、「持続可能な開発目標」の実現には、5つのPについて、3つの側面を同等に重視し、しかも「だれ一人取り残されない」という理念に向かわなければならない。この目標実現への絶対的な解は存在するのだろうか。美しい自然科学の解を見つけるようには、SDGs 実現の行動解は見つからないだろう。なぜなら、私たちは、環境・経済・社会および人間について、あまりにも無知であるからだ。人間とは何か、平和とは何か、幸福とは何か等々、少なくとも現時点で世界中の人々にそれらについての共通理解が存在しているとは思えない。それでもこの目標に向かうべきだと世界各国は賛同している。この目標実現のためには、世界中の人々が環境・経済・社会および人間について学習を重ね、世界市民として理解と行動、反省と修正を続けることが必要である。世界中に、そのような人々を育てなければならない。地道に皆が価値観を共有し、力を蓄えて、社会のパラダイムシフトを起こす以外に「持続

可能な開発目標」への道はない。その道を、教育と共に作って行かなければならない。

3. 教育の効果

「現代社会と科学技術」の授業で、「AI に政治はできるか」をテーマとしたことがある。この授業は、シラバス通りの日程で 2021 年 10 月 21 日（木）に行い、授業内容確認課題として各自の意見をレポートにまとめさせた。2021 年 10 月 28 日（木）の授業で、上記課題のレポート例を紹介した。この年の 10 月 31 日（日）は、衆院議員選挙であった。選挙後の総務省発表によると、全国投票率は 56%、18、19 歳の投票率は 43%、20 代の投票率 37%とあった。1) 若者の投票率の低さに驚くと共に、偶然ではあるが「AI に政治はできるか」がタイムリーな授業であったので、これが投票行動に影響しているかどうか気になった。翌週は学園祭で授業は無く、11 月 11 日（木）「現代社会と人間生活」、「情報と職業」のリアルタイムリモート授業中にアンケート調査をした。また、本学小沢先生のご協力により、一部の学生にもアンケートをお願いした。さらに、私が担当している東京学芸大学「中等理科教育法Ⅲ」でも、リアルタイムリモート授業中にアンケート調査をした。アンケート結果を下表に示す。

	受講生			
	A	B	C	D
回答数	20	66	20	55
出席数	26	74	162	59
質問 1	85%	94%	91%	93%
質問 2	53%	65%	74%	53%
質問 3	20%		0%	

表の補足

各質問内容は、次の通り。表中の数値は「はい」の%

質問 1：投票権はありましたか

質問 2：投票しましたか

質問 3：現代社会と科学技術の授業を受けていますか

・受講学生について

「AI に政治はできるか」は、B の授業でのみ扱っている。この内容の授業実施日とアンケート実施日が異なるので、B の学生といえども「AI に政治はできるか」の授業を全員が受けている保証は無い。A の 20%についても同様である。

A:東京工芸大学 情報と職業 受講生

B:東京工芸大学 現代社会と科学技術 受講生

C: 東京工芸大学 小沢先生授業の学生(教員免許関連講座受講者)、授業外にメールなどでアンケート用 Forms の URL を学生に流して得た回答。この講座名と受講学生数は以下の通りであるが、どの講座受講生が答えているかは不明。

メンタルヘルスと心理 95 名・・・1、2 年生が主

生徒進路指導論 27 名・・・3 年生が主

発達心理 40 名・・・1 年生が主

D: 東京学芸大学 中等理科教育法Ⅲ

・回答、出席者数は人数、ただし、C は授業中ではないので、回答者人数と受講者合計人数

・投票率は、選挙権の無い人を除いたもの

現代社会と科学技術受講生は、「AI に政治はできるか」について活発に議論し、レポートからもよく考えている様子がうかがえた。投票率の全国平均には大学生以外も多数含まれるであろうが、18～24 歳の投票率は 40%足らず、これから比べれば、アンケートに答えた学生たちの投票率は高めである。特に現代社会と科学技術の受講者の投票率は全国投票率を大きく上回っている。C については、回答率が極めて低いので、もともと意識の高い学生がアンケートに答えたのかも知れない。もちろん、「AI に政治はできるか」の授業とは関係なく、現代社会と科学技術受講者自体がはじめから政治意識が高かったのかも知れず、評価は容易ではない。

科学技術の授業からでも投票率に影響を与えることができたのでは無いかと感じている。投票率の上昇は、具体的な社会のあり方に対する意識の上昇でもある。この意識と科学的な根拠に基づく科学的判断力を高める教育を続ければ、SDGs の達成にも影響し得るに違いない。むしろ教育こそが、世界市民を動かし SDGs の達成に向かわせる最強の力である。

4. 激動の時代こそチャンスである

21 世紀の初め、私達は地球環境問題、全世界的経済危機をはじめとして、さまざまな紛争をも抱えている。世界は、沈鬱で、しかも不安定である。このことは、世界的な激動の時代の学生にとって幸運である。変えたい世界、変えるべき世界がそこにあるからだ。あとはそのための力を蓄えればよい。

人類は、いま大きな転換期を迎えようとしている。人類の持続的発展への、社会構造、人々の価値観、行動様式などに関するパラダイムシフトが必要となる時がきた。これを誰が起こすのか。それは今を生き、未来に羽ばたく自分を含めた世界市民の行動以外にはあり得ない。もちろん、学生諸君は、今の自分にその力はないと感じているであろう。しかし、現状への不満と努力する自信さえあれば、いつかその日を迎えに行ける。今は、十年先を見据えて力を蓄えるときである。そのためには、世界の現状を分析的に捉え、未来を推測できる高度な専門性と、予測不能な問題にも柔軟に対応できる豊かな教養、他人を思いやる感受性を身につけることである。できる限り深く、広く。

チャンスは、いつやってくるか分からない。それを活かせるかどうかは、運ではない。不断の努力で蓄えた総合力である。

21 世紀に要請される SDGs 達成というパラダイムシフトを実現するには、世界中の人々を動かさなければなら

い。動かすのは自分である。そんな世界市民を育てる教育が必要である。

コペルニクス的転回から 500 年を迎える頃、私たちが教えた学生たちが若き世界のリーダーとして新たな SDGs に向かっているにちがいない。

第2章 SDGs と日本文化における思想

小沢一仁

1. SDGs の評価すべきところと問題点

世界全体を見つめ、様々な国の違いを越えて、共通して目指す未来の姿を想定した SDGs について、17 の目標、169 のターゲット、2 つの理念、5 つの原則、3 つの側面に対して異論や異議を唱えることはないだろう。つまり、これらの内容はどこでも誰でも賛同できるものである。この点で、人類共通の目標設定であるといえる。

ところが、誰もが異論を唱えることはない SDGs であるが、敢えてその課題を探ってみる。まず、蟹江が「SDGs に含まれない重要な社会的側面がある」としているように、SDGs に人間が生きる上で全ての重要なテーマが挙げられているわけではない。そして、「(SDGs の) 目標自体に文化は含まれていない¹⁾。あるいは芸術も、生活の質や心の豊かさのためには非常に重要なものであるものの、SDGs のなかでは言及されていない」と述べている¹⁾。

では、SDGs において何が最も重要なものかという点、蟹江は「持続可能な開発のための新たなイメージ」として 3 つの同心円状の図を示している (Giggs et al. 2013)。その図では、最も中心に経済 (economy) があり、次に社会 (society) があり、最も外側に環境 (Earth's life support system) が位置づけられている。つまり、SDGs の中心は、経済である。もちろん経済が人間が生きる上で重要なことは誰もが否定しないことである。しかし、生きることの中心に経済が来るかどうかについては、議論が必要である。

先に、示されたように、文化や芸術が SDGs には含まれていないが、可能性として、文化や芸術こそが、人間が生きる上での中心に来るという見方もできる。つまり、蟹江が「心の豊かさ」と述べたことこそが、生きる上での中心に来るのではないか¹⁾。このように、SDGs の第一の問題点とは、何が生きる上での中心に来るのかという問いに対して、その答えが経済とすることの問題である。

次に、SDGs 自体は、国連加盟国で共有されたものである。その背景の思想を考えれば、言い換えれば、グローバリズムという、地球一体主義といえるものに行き当たる。特に経済面では、多国籍企業が、ひとつの国だけではなく複数の国において、自由貿易や市場経済につながっていく。つまり、先に見たように経済発展を中心においているのであり、しかも、国の特性、地域の特性を無視して、世界共通を迫る危険も生じる。こうしてみると、グローバリズムに対して、地域中心主義といえるローカリズムという見方

が対立軸として置くことができる。

SDGs においても、各国の事情において、目標への手段はまちまちであると示されている。各国の状況から SDGs が示す目標に進んでいけばいいのであるが、その中で、各国の特性やよさが消し去られてしまえば、元も子もない。蟹江は、日本における各地域での発展、いわゆる地方の活性化のために SDGs を用いる例を挙げている¹⁾。そこでは、各国や地域の特性を重要視しながら、SDGs を目指すことが重要であり、ローカリズムとグローバリズムをつなげようとする試みが行われている。

このように、各国の特性や地域を重視して進めていくことができればよい。しかし、グローバリズムに傾くことによって、ローカリズムを失い、各国や地域の特性を失う危険がある。このことが、SDGs の第二の問題点である。

2. ローカルリズムに立つて日本における伝統思想を振り返る

いかなる地球上の人間であっても、どこかの国や地域に属している。つまり、ローカルの中で生きている。その地域を自画自賛するのではなく、また国粋主義に陥ることなく、すぐれたよさを見出すことは、生きる上では重要である。このことは、個人においても同様である。いかなる国、地域、個人であっても、その中におけるよさを自覚することから、そのよさをもとにして、地球全体を考えるに至る。現代において、グローバルな見方をもとにした、SDGs のような見方を、いかに取り入れるかを考えることが重要である。

そこで、日本というローカルな国において、いかなる思想が伝統的に育まれてきているのかを振り返ってみる。

末木は、日本の思想史研究は成果が確実に積み重ねられているが、「対象も方法も多様で、必ずしも標準的な理解が成り立っているわけではない」と述べている²⁾。そして、「全体的な流れや動向をどう把握したらよいか、明確ではない」と述べている。その理由として「日本の思想は外来の思想をもとに、それを変容することで形成されている」としている²⁾。外来の思想とは、古代からの歴史をたどれば、例えば、儒教などの中国からのものであり、中国を経由した仏教である。そして、近代になると西洋からの思想が入ってくる。その中で、末木は、近代以前の日本思想の基底に関わる内容においては、王権という「政治思想」と、神仏という「宗教思想」というふたつの軸を両極に置き、その間に文学・芸能や実践的な倫理思想、医学・暦法・労働・技術に関わる「学芸―生活」における思想の 3 つの分野を示している²⁾。

先に、SDGs において、環境・社会・経済の中で最も中心にあるものは経済であると示した。そして、その経済に替わる基底は何かという第一の問題を提起した。その基底とは、歴史的に見て最も根底にあると考えられるものである。すると、日本の伝統的な思想において、政治・宗教・学芸-生活の中で、最も基底にあるものは宗教であると考えられる。なぜならば、現代の日本に住む人々においては

当然経済中心であるが、古代において生きる指針を与えていたのが、この3つのうち宗教であると考えられる。この日本における宗教思想について、末木は、「土着の神と外来の仏」、「神と仏の関係」であり、「仏教と神道という体系化された思想の問題」があるとしている²⁾。

3. 梅原による日本文化の本質～草木国土悉皆成仏の思想

日本における宗教思想の基底をたどれば、末木の指摘する「土着の神と外来の仏」の関係に行き着く。そして、土着の神と外来の仏との関係において、より基底にあるのは前者である。前者は神道のもとになるものである。神道に着目すると、伊藤によれば、そもそも神道が形成されたのは、11～12世紀における中世の神仏習合的状况にあるとしている。そして、それに対して、通歴史的な日本の神への信仰は、「神祇(じんぎ)信仰」「カミ信仰」と呼ぶとしている²⁾。この見方からすると、神道成立以前の土着の神への信仰は、神祇信仰またはカミ信仰というべきものである。それでは、そのカミ信仰とはどのようなものであり、その基底をもとにして、どのように日本における宗教思想を捉えたらいいのか。

梅原は、西欧哲学を背景にした科学文明によって、人類は危機に瀕しているとする³⁾。そして、梅原は、普遍的な人類の立場に立つ「人類哲学」を提唱する。そして、その核として、「生きとし生けるもの」という思想をもつ日本文化に着目する³⁾。

日本文化の最も基底に、梅原は縄文文化を置く。梅原による指摘を以下に素描してみる。縄文時代において狩猟採集文化において、自然信仰が行われていた。そして、稲作文化がもたらされた弥生時代を経て、日本は大和朝廷の時代から平安時代へと進んできた。この中で先に示したように、仏教が大陸からもたらされ、神仏習合が起こり、カミ信仰側では、仏教を取り入れ、神道が成立していった。そして、仏教側においては、最澄と空海とが並び立つ。その後、中国に渡った円珍と円仁が伝えた天台密教と空海が伝えた真言密教が融合し、比叡山中興の祖である元三大師といわれる良源によって天台密教が再興された。この天台密教における「天台本覚(ほんがく)思想」が日本文化の本質であると、梅原は述べている³⁾。その本質を示すものとして、梅原は「草木国土悉皆(しっかい)成仏」を挙げている。人間だけではなく、もちろん動物も、そして、植物である草も木も、さらには、国土である山も川も、みな「生きとし生けるもの」であり、仏としての性質をもち、「仏になれる」つまり、「生きている」ということを示す³⁾。

もともとカミ信仰そして神道における信仰の場である神社では、古事記や日本書紀に描かれた神話の人物を神として、そして、岩、石、山という自然も神とし、稲荷、オオカミ、大蛇、龍、八咫鳥等の空想上も含めた動物も神とし、神木として木も神として祀る。さらには、歴史上の人物も神として祀る「人神信仰」もある²⁾。つまり、神話の人物、歴史上の人物、空想の動物、植物、自然、そして、

人間も、すべてを神として、祀っているのである。また、仏教における信仰の場である寺では、如来、菩薩、天部等が仏像として具現化され置かれており、信仰の対象となっている。

こうしてみると、縄文文化に根ざした自然信仰をもとにして、仏教との出会いによって、この世のありとあらゆるもの、つまり、すべてが「生きとし生けるもの」であり、仏になる仏性という命をもつという見方が、日本文化の基底にはあり、このことを梅原は「草木悉皆国土成仏」に着目して、明確化したといえる。

さらに、梅原が指摘した基底を文化にもちつつ、現代の日本文化はどのような状況にあるのだろうか。科学文明の発展に基づく便利な道具をツールとして、仕事でも余暇でも用いている現代の日本社会においては、まさに西洋化した個人主義の影響を多大に受けていると言わざるを得ない。流行は、そして、文化を規定する人々の価値観は、主にアメリカをはじめとした西欧から来ている。つまり、現代日本文化の主流となっているものは、西欧文化であり、明治以降の日本の宿命とも言える歴史の流れの中で、継続した延長線上にあるといえる。

このような自覚のもとに、戦前のような国粋主義に陥ることなく、日本というローカルな立場にたって、グローバルズムに対応する文化を明確にする必要があると考えられる。

4. すべてが「生きとし生けるもの」という思想が普遍的思想となり得るか

梅原が日本文化の本質として取り上げた、草木悉皆国土成仏は日本という国に特徴的に成立している。この見方を取ると、環境破壊はありえない。自然を大切にすることは、生きる上で必須である。もちろん、狩猟採集文化においては、自然は恵みを与えてくれるものであり、SDGsにおける経済も社会も、自然という環境によって成り立っていた。つまり、狩猟文化においては、自然という環境が中心にあり、経済と社会が成り立っていたのである。このように、同心円の中心が、現代社会と異なっている。こうしてみると、現代社会においては、同心円の中心に、自然を置くことはなりえなくなっている。

梅原は、西欧文化においても、産業革命後の工業文化があり、それ以前は牧畜文化があり、もっとも基底には、日本と同様に、狩猟採集文化があったとみる。つまり、西洋においても、狩猟採集文化こそ基底にあるといえる。日本においても、西洋においても、どこの国においても、どのようにしてすべてを生きとし生けるものとしてみる見方を、普遍的思想として位置づけることができるだろうか。

このことが、SDGsに対して、日本文化というローカルな位置から、グローバルな世界へと提言していく過程での課題である。そして、経済を中心に置くのではなく、すべてを生きとし生けるものとして捉える見方を置くのである。このことがいかにしたら可能となるかをさらに明確にする必要がある。

5. SDGs の教育とすべてが生きているという思想

梅原が着目した草木悉皆国土成仏という森羅万象の全てが生きているという見方は、先に示したように、根底には縄文文化という狩猟採集社会がある。人間の生活は、自然の恵みから得てきたのである。この点で、環境が中心にあり、経済と社会が成立している。そして、その環境とは自然のことであるが、アニミズムという森羅万象をカミとして敬い、そして、その恩恵を受け、ときに祟りを受ける場合もある²⁾。このことから、環境のさらになる元に、森羅万象が生きているという考えがある。

見方によっては、生産活動が自然からの恵みを受けることであるから、自然を大切にすることは当然であり、必要なことでもあったといえる。稲作を中心とした農耕文化においても、自然との関わりは必須であった。自然を敬いその恩恵を受けるという人類と自然のやりとりを、梅宮は「循環の思想」と呼んでいる³⁾。この循環が、工業社会となると自然との関わりは断絶してしまい、科学文明によるものの豊かさの恩恵を受ける反面、公害等の負の側面を自然に与えてしまうことになったことは周知の通りである。このように、環境破壊は、人間と自然の循環の断絶と捉えることができる。

また、この循環を、人間社会に置き換えてみると、人間関係においても相互に尊重し合う関係は、人々の間の循環において維持されていると見ることができる。逆に、格差、差別が生じている場合は、循環が断絶している状態である。教育において問題となる、いじめにおいても加害と被害の子どもたちにおいて、相互の関係は断絶している。また、自殺の問題においても、人間関係の循環はなく孤立してしまっているといえる。ここでも、子ども同士や人間についての見方が、いじめや自殺が生じる場面においては、関係が断切し、循環はなくなっている。これら場面では、相互に生きとし生けるものとは理解していないであろう。関係相互に、循環をもたらすこと、互いが生きとし生けるものであることを理解すること、そのことが人間関係に循環をもたらすきっかけになる可能性がある。人間同士、子ども同士の関係においても、相互に生きとし生けるものと理解することができない状態があり、そして、ましてや自然に対して生きとし生けるものと捉えることは難しいのは当然であろう。

こうして考えると、教育において、SDGs を目指す上では、アニミズム的な世界観を、いかにして現代の科学文明が発達した中で、甦らせることができるかということが課題である。そのことで、人間同士も含めて、森羅万象を生きとし生けるものとして相互に捉えることこそが、重要である。このような見方の転換がどのようにすれば可能となるか。この方策の試みが教育における新たな課題となるだろう。

引用参考文献

はじめに

- 1) 蟹江憲史 2020 SDGs (持続可能な開発目標) 中公新書

第1章

- 1) 内閣府 科学技術政策 Society5.0 とは
https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html
- 2) 公益財団法人 明るい選挙推進協会 衆院議員選挙年代別投票率の推移
<http://www.akaruisenkkyo.or.jp/070various/071syugi/693/>

第2章

- 1) 梅原猛 2013 人類哲学序説 岩波新書
- 2) 伊藤聡 2012 神道とは何か 中公新書
- 3) 蟹江憲史 2020 SDGs (持続可能な開発目標) 中公新書
- 4) 末木文美士 2020 日本思想史 岩波新書